

山本 登志哉
(Yamamoto Toshiya)



早稲田大学教授

教育学博士。早稲田大学教授。子どもとお金研究会代表。日本質的心理学会理事・編集委員。法と心理学会常任理事・編集委員長。日中韓越の人々による円卓 ML 管理人ほか。

1959 年青森県生まれ。呉服店の丁稚を経て京都大学文学部・同大学院で心理学専攻。パートの保父をしつつ行った、所有行動の発生に関する修論研究で日本教育心理学会城戸賞受賞。奈良女子大学在職時に文部省長期在外研究員として北京師範大学に滞在。所有行動の文化比較で同大学の教育博士号取得。共愛学園前橋国際大学在職時に始めたお小遣いの日中韓越共同研究に関わる理論論文で中国の朱智賢心理学賞受賞。

主著:『生み出された物語』(編著:北大路書房)、『Money as a Cultural Tool Mediating Personal Relationship』(共著:in Cambridge Handbook of Sociocultural Psychology)、『アジア映画をアジアの人々と愉しむ』(共編著:北大路書房)、『孔子の国の子どもたち』(連載:ミネルヴァ書房「発達」)、『嬰幼兒“所有”行為与其認知結構的發展』(博士論文)など。

日中比較の中で見えてくる「文化としての発達」

海外からすぐれた文化を輸入し、改良して活用すること、それが現代までの日本社会が培ってきた伝統的な生き方である。

戦前の日本は、江戸時代まで長くモデルだった中国を捨て、欧米列強の文化・技術を導入して急速に力をつけ、さらには日本文化に世界性を見て植民地争奪戦へと進み、中国をはじめ多くの近隣諸国と日本に膨大な死者をもたらして完全に挫折した。

戦後日本はアメリカにモデルを切り替え、経済の世界で再度世界への挑戦を続けて奇跡の成長を成し遂げた。ところが冷戦後世界が大きな転換点を迎え、グローバリズムと反グローバリズムが世界を大きく揺るがす中、日本社会は新しいモデルを見いだせないまま、アイデンティティー危機に陥っている。

私は「文化としての発達」という問題は、このような世界状況の中で著しくその切実性を増している問題だと考える。一方で経済的な世界の単一化の方向はますます強まり、他方文化的な面では単一化がほとんど不可能であり、その強行は軍事的対立をも生み出すことは、現在の世界を見ればわかる。発達心理学も、ヒトという種に共通する「普遍的な発達」像を描いているだけでは、もはやリアルな人間の問題に迫れない。

しかし一面的な「文化性」の強調が、往々にして独善的な自文化中心主義に陥る危険性はこれまで世界が繰り返し体験してきたことである。問題は独善に陥らない文化的アイデンティティーをどのように見いだしていくことができるかであり、それを可能にするのは「対話的な研究」だ、と私は考えている。それは世界の文化的価値観の豊穡性を、また集団内の多様な個が生み出すダイナミズムを見いだす作業になる。

それぞれの社会に於ける個性的で文化的な発達の姿を、日本と中国の子どもや教育の姿を素朴に比べてみることから見いだす、そんな作業のひとつを行ってみたいと思う。